

2018年11月10日（土） 台湾原住民族との交流会25周年記念拡大例会@明治学院大学

## 台湾高地先住民の歴史記憶と脱植民の運動（&書評会）

中村 平 (husv83@gmail.com)

自己紹介：1990年代後期から台湾の北部山地の先住民（タイヤル・セデック・トゥルク）を中心に聞き書き。日本植民主義、暴力の記憶、脱植民化（decolonization）の研究。

『植民暴力の記憶と日本人：台湾高地先住民と脱植民の運動』（大阪大学出版会、2018年）、草風館『台湾原住民文学選』（全十巻）、周婉窈『図説 台湾の歴史』（平凡社）の翻訳など。本日のライン：「台湾高地先住民の歴史記憶と脱植民の運動」として、日本の植民地統治を中心にその歴史と記憶について、また先住民と日本における脱植民化とは何かを考える。

- ・「台湾は親日」だという言説についてどう考えるか。
- ・日本による台湾植民地統治について、台湾先住民は、日本人はどう考えているのか。
- ・植民地統治、その上に展開したいろいろな戦争で亡くなっていった人たちの声をどう聴くのか。

### 14時10分～ 「二つの慰霊碑：台湾霧社事件を追う」を見る／から考える

①柳本通彦「二つの慰霊碑：台湾霧社事件を追う」（1994年？）（30分）

テレビ朝日、朝日ニュースター「8mm ドキュメント Free Zone 2000」（中條亮子アナ）。

②まとめと討論・感想会。（30分位）

・霧社事件。「セデック・バレ」2011年台湾。魏徳聖監督。4時間半。2013年度使用教科書では、中高の歴史教科書全26点中、中学2点、高校2点の4点のみ。つまり7分の1の教科書しか扱っていない。

・家永三郎の『新日本史』（三省堂、1974年）を嚆矢。「高砂族」が「暴動」という表現。以降、記述を改善しながら、2004年まで。中村（2013）参照。

・霧社事件に至る前史。日本の帝国主義的拡張（関連年表参照）。

・（内容）「セーダッカ」「セデック」民族。Seediq/ Sediq/ Seejiq、賽徳克。田中角栄首相、1972年の日中国交回復と日台断交、日本人慰霊塔。抗日記念碑は、1953年に反共のための防空壕づくりの際、多くの遺骨が出たことから。1973年に台湾大学でモーナ・ルダオ（霧社事件の指導者）の遺骨が出た。娘マホン・モーナの話。日本警官・下山治平とペッコ・タウレ——下山——下山操子。トラウマ的な状況。

・柳本通彦『台湾・霧社に生きる』（現代書館、1996年）にも執筆。

### 15時25分～ 台湾高地先住民の歴史記憶と脱植民の運動

・植民主義とは、民族自治運動と歴史の解釈、脱植民化。戦場への動員。暴力の上に施行された植民地統治。

・台湾先住民。清朝期の 18, 19 世紀に人口が逆転し、先住民はマイノリティになった。中央山脈に広く住んでいた先住民は清朝の支配を受けず、自治を行っていた。タイヤル、セデック、ブヌンなどの民族。2018 年現在、中華民国政府により 16 民族公認。中国では「高山族」。

・日本統治期に人類学分類。戸籍（「戸口」）制度により管理。1910 年代、7「(種)族」分類（台湾総督府）。1935 年、9「族」（台北帝国大学土俗人種学教室）。中華民国下においてもこのパラダイムが継続。1980 年代以降、「自称」による民族認定運動（「正名」運動）。

・日本の台湾植民地統治と先住民。日本の植民地統治により近代国家に包摂。特に、1910 年から 14 年にかけての「理蕃五カ年事業」（明治 44～大正 3 年）。太魯閣戦争／戦役（1914 年）。反抗する先住民（北部山地）を武力鎮圧した。日本統治に抵抗して殺された先住民の歴史の復権と掘り起こし。ブヌンのラマダセンセン、トゥルクのハルク・ナウィ【写真あり】。

・名前の問題。日本統治初期：蕃人、蕃族。「理蕃」政策。（理：おさめる、処理）中期：高砂族。中華民国：山地同胞・高山族。1980 年代の先住民運動（名前、正名、土地返還）。1994 年憲法修正「原住民」。1997 年「原住民族」。

・日本語における「原住民」の意味合い。訳語としての「先住民（族）」。

・日本植民主義の実態。「理蕃」、「討伐」という植民主義的用語。多くの先住民が戦争状態で殺され、その実数は不明。統治は武力鎮圧と武装解除（銃器の押収）の上に始まった。

・台湾山地は「特別行政区域」通称「蕃地」とされ、平地とは異なる統治をおこなった。警察駐在所が行政から司法、教育を一手に引き受けた。

・銃器の管理は反抗を押さえるために最も神経を使った。初期には多くの警官が首狩りの被害に遭った。焼き畑狩猟を行い、遊動的に暮らしていた先住民に水稻を教えた。日本語教育を進め、日本名をつけ、皇民化教育が行われた。霧社事件（1930 年）の衝撃。

・植民（地）主義（コロニアリズム）とは何か。啓蒙や文明化の対象と見なすこと。対象の主体性の否認。植民地近代性（コロニアル・モダニティ）と暴力の問題。植民暴力。

・脱植民化とは、こうした植民主義（暴力を含めた）を克服すること、乗り越えること。

・中華民国総統の謝罪（2016 年）。蔡英文、民主進歩党政権（2016 年 5 月～）。8 月 1 日、先住民族の日。「先住民族は苦痛や不公平な待遇を受けてきた。政府を代表して謝罪する」【写真あり】。差別、白色テロによる圧迫。国有化された伝統的な土地の問題。日本植民主義の清算が問われている。

・民族自治の探求。タイヤル民族議会（2000 年）設立。セデック民族議会も。未だに法の裏付けは取られない。自発的組織（voluntary association）。植民されてきた歴史の追究。土地返還要求。

・「原住民族自治法」が議論。「原住民族基本法」（2005 年）。

## 植民地経験の記憶の聞き書きから考える：記憶の分有ということ

（拙著第2章「植民暴力の常態化としての『和解』：『帰順』をめぐる日本とタイヤルの解釈」より抜粋）

・桃園市復興区三光村エヘン集落と周辺。日本語で日本人の私に2000年前後に語られた。

70歳（聞き書き時）の男性、ユタス（おじいさん）・ワタン。日本名山路幹夫、中国語名高成立、エヘンから30分ほどのガオガン教育所で4年勉強した。「（タイヤルは）山で日本と戦った、宜蘭<sup>1</sup>のほうだ。日本は**平和にさせる**」。「お父さんは（考え方が）以前の人、日本が台湾を占領した時、（タイヤルは）馬鹿よ、（日本と）戦争する……山地ならタイヤルはまるで遊撃隊みたいだ。日本の弾を取る、弾はだんだん多くなる。人を殺すのは男らしい、nan zi han（男子漢、漢語で男らしい人という意味）だ……日本は**山地を全滅させる**つもりらしい。そのとき前山<sup>2</sup>からワタンという人が来た」。

「ワタン」は日本人だが、タイヤル語を流暢にあやつり、通訳として活躍し、タイヤルの人々に反抗をやめなさいと諭しに来た（日本の警部）。「一番ひどいのが、**日本が（山の人を）処理した**という話だ。この辺りよ。山の人（タイヤル）は、おーこれは聞かないといかんと言って、だんだんと**平和になった**」（日本語でのインタビュー）。

64歳男性のユタス・シラン。敗戦当時9歳。「日本人とタイヤルはボンボン山の戦い<sup>3</sup>をして、そのあとsblaq（スブラック）した」。

（筆者）「スブラックは日本語ではどういう意味なんですか？」

（シラン）「**仲良くする**」。

（筆者）「じゃあ、タイヤル語で降伏するは？」

（シラン）「……」。

降伏するという言葉は、タイヤル語には翻訳しにくいようだ。

（シラン）「日本人はバロン<sup>4</sup>から大砲を打ったよ」。

61歳男性のママ（おじさん）・ウマオ。敗戦当時5歳で、日本との戦闘におけるタイヤルの指揮官について話してくれた。「指揮官は**ハカオ・ヤユッツ【息子の写真あり】**だ。日本人はユカン・ワタン（日本人の通訳者）を派遣してきた。彼は山の言葉を話せる、ボンボン山の戦いの先頭に立った。彼は**仲良くしないとだめだ**と言って、ハカオ・ヤユッツと話した。だけどハカオはだめだと言った。」「ハカオはその戦いで死んだよ」（漢語での会話）。

後で確認すると、ママ・ウマオは、祖父の兄がハカオにあたり、血縁関係は非常に近いことが分かった（拙著96頁の系譜関係参照）。

エヘン集落の武将ハカオ・ヤユッツはボンボン山の戦いで戦死した。タイヤルのヤキ（お

<sup>1</sup> 宜蘭県は桃園県の隣県。

<sup>2</sup> 桃園県の平地に近い地域を前山といい、エヘン集落は後山に属する。

<sup>3</sup> エヘン集落から南東直線距離約11キロ。現在の梵梵山(1713m)。エヘンを含む「ガオガン蕃」各集落の戦士と日本軍警が1910年に激突した。

<sup>4</sup> エヘン集落から北東直線距離約2キロの隣の部落。「ガオガン蕃討伐」当時、日本軍はバロン山（現・上巴陵の馬崙砲台）に大砲を据え付け、弾を発射し、周囲の「未帰順」部落を威嚇した。

ばあさん)・ピスイ(79歳女性)によれば、ハカオは戦闘でけがをして、木の洞穴で死んだ。「背が低いけど、一番強い」人だった。彼の死体は、日本人に見つからないように、山奥の滝の裏側に隠した。現在も遺体はそこに残っているはずだという。なお、彼の息子ベフ・ハカオは、その後エヘン集落の駐在所に警手として雇われた。

エヘン集落のとなり2キロ、テイリック集落の男性ベフイさん(78歳)。1999年に初めてお会いした方だが、第三回高砂義勇隊でニューギニアに赴き、九死に一生を得て台湾に帰ってきた経歴を持っている。「バロンに(日本の)砲台があった。Teqliaq(テイリック)まで飛んでくるよ<sup>5</sup>。タイヤルが悪いことをするので、(日本は)そうする(大砲をうつ)。僕らは破片を使って、それをたたいて伸ばして、くわを作る。『ああ、日本人はありがたいな』って」。

(筆者)「それは何時ごろの話なんですか? ユタス(おじいさん)が生まれる前?」

(ベフイ)「お父さんの話を聞いたんだ。(中略)バロンの一番高いところに、日本の兵隊がおった」。

(筆者)「日本との戦争はどうだったんですか?」

(ベフイ)「やっぱりあった。実際は日本人は、タイヤルを教育したいという気持ちで(戦争を)したんだ。あの時、ひとりの警部がおる(前述の日本人通訳)。ワタンと(タイヤルの名を)つけたらしい。ガオガンに頭目を集めて言った、『どの頭目が日本人を殺すのか?』って。カラホ<sup>6</sup>の頭目が(自慢して)言った、『わたしが率先して日本を殺す、わたしはとても勇敢の人』って。(日本は)あの人間を捕まえて、バロンに持っていった。本当は撃たれるはずなんだ。(カラホの頭目は)ユカン・スヤンという名前のタイヤルだ。(日本はユカン)を家(兵営)の一番上に置いた(監禁した)。その前は、みな兵隊が寝てるよ。(そのとき)警部がささやきして(ささやいて)(ユカンに)話した。「君は殺される」。要領があったよ、あの警部。バロンの下、鉄条網があったけど、(警部は)あのタイヤルに後ろから「早く逃げて、飛んでいけ」と話して、門を開けた。山地人は(兵隊の)腹の上を踏んで外に逃げた。鉄条網の上から逃げた。タイヤル(ユカン・スヤン)はうち(カラホ社)に帰った。

(日本は)しゃくに触ったらしい。まだ日本はいじめに**来た**そう。そしたらユカンの足に鉄砲があたった。それでユカンは死んでしまった。あの(ユカンの)孫がまだおる(生きている)よ。名前は知っていない(知らない)。そのときはちょうど、日本が**指導に**来た時。明治らしい。その話はみんな分かってる(知っている)。年寄り連中がよく話してくれる。仕事して休んだ時、いろいろ話を持ち出すよ。実は日本の警部もタイヤルに**同情する心**がある。(ユカンに)改心しなさいと言ったのよ。でも(ユカンは反抗して)最後に死んでしまった。そのとき私のお父さんは玉峰<sup>7</sup>あたりにおった。こっちに入ったら(移住してきたら)、(そんな)話がみんな分かってしまう(みんなが話すので自然と分かるようになる)」。 (1999年の話)

<sup>5</sup> 直線距離にして4キロ強である。

<sup>6</sup> カラホ集落。エヘン集落の南東直線距離約5キロ。

<sup>7</sup> マリコワン群の一集落。ベフイさんの父親はマリコワン群の出身で、テイリックに移住してきた。

翌年もう一度聞いた話。「ユカンはまだバロンに行ったよ、日本を殺した。そしたら兵隊に足を撃たれて、病気になって死んでしまった」。

(筆者)「ユカン・スヤンの話は、bu makao (ボンボン山) の戦いの前の話ですか？」

(ベフイ)「bu makao が先。タイヤルは激しく日本人を殺した。日本人はシナレク、バロン、マメーに大砲を置いた。ユカン・スヤンの話はわたしが生まれたころかな<sup>8</sup>」。

## 日本の植民地統治についての記憶に会うこと

以上のように私に日本語で語られたタイヤルたちの記憶について、考察したいと思う。こうした日本語による語りでは、日本が執り行った「帰順式」とその後の統治を、「仲良くした」「和解した」と解釈している。日本は「平和にさせる」「指導に来た」「(山の人を)処理した」「いじめに来た」という表現もあった。1910年の日本とタイヤルの激突以降、日本により駐在所が作られ、銃器が押収され、タイヤルたちは表向きには反抗できなくなっていた。抵抗の声は押しつぶされ、日本の存在について問答無用の植民地統治がここから始まった。仲良くするためには、武力をも辞さなかったのが日本の植民地統治ではなかったか。それをタイヤルたちは、「仲良くした」と信じていたのだろうか。その表現が日本側からなされた可能性があることは、「ワタン」と呼ばれた日本人の警部の語りからも伺えよう<sup>9</sup>。

また、タイヤルと日本の今の関係性というコンテクストを考えてみよう。日本は敗戦したとはいえ、聞き書きを行った2000年頃の日本の大国的な位置は、かれらによく理解されているし、桃の苗や、飯盒、魚とりの道具など日本のモノは愛好されている。そして以上見たように、何よりも日本は、統治初期に強大な軍事力を台湾高地でふるった存在である。日本語で日本人の私に2000年前後に語られた植民地についての記憶を、そうした台湾—日本、台湾高地—日本というポジショナリティ(どの位置に立っているか)の認識抜きに聞くことは出来ないのではないか。上のような語りから、もし「仲良くした」「和解した」「平和」という言葉を取ってきて、「親日的な語り」と認識してしまうとしたら、いかがだろうか。「親日的な語り」と認識してしまうことには、その行為遂行的な意味が出てくるだろう。語りの背後に存在している歴史の重み(それは植民の暴力なのではないか)を感知してしまう「私たち」は、こうした語りを「親日的」だとすることができるだろうか。

日本の大砲の破片でくわを作り、それを「ありがたい」と日本人である私に語る行為とは、一体何を行っている(遂行している)のだろうか。それが、あの「南洋」での激戦をくぐり抜け、死んでいてもおかしくない戦場から戻ってきた、日本人と共に戦った高砂義勇隊員の語りでもあったし、いつもユーモアを絶やさないユタスの語りの一部でもある。

---

<sup>8</sup> ベフイさんが生まれたのは1921年のはずなので、ユカン・スヤンの話はそれより10年程前の出来事である。日本植民側は、「ガオガン蕃方面隘勇線前進」という名称で始められる「理蕃五箇年計画」を執行したという認識である。ガオガン方面では1910年5月から11月にかけての戦闘が記録されており、「帰順式」(11月20日)が行われた。猪口安喜編1921[1989]『理蕃誌稿』第三編、台北：台湾総督府警察本署を参照。

<sup>9</sup> この警部については、1923年に発行された『台北州理蕃誌(下編)』(台北州警務局)にて、その名前を中間市之助警部とほぼ確定できる。

少なくとも言えることは、上のような語りには、あの 1910 年の日本とタイヤルの激突を生きたタイヤルたちの経験の痕跡が記されているのではないかということだ。そして私とは、帝国日本を引き継ぐ日本から来た存在であり、「南洋」で共に戦った日本人の子孫であり、同時にユタスにとり日本のタイヤルへの植民暴力を喚起する存在であった。ユタスの一件糾弾しない語りは、それを私に喚起していたことを、今私は反芻している。日台で課題となっている脱植民化―植民主義に抗するということ―を、ここから考え直していきたい。

#### 【関連年表】

1868 年、明治維新 1869 年、開拓使の設置と「北海道」改称  
1874 年、台湾出兵  
1875 年、江華島事件、翌年に日朝修好条規（不平等条約）  
1879 年、琉球併合、沖縄県  
1889 年、大日本帝国憲法発布  
1894 年、日清戦争、翌年に台湾併合  
1904 年、日露戦争  
1910 年、韓国併合（～14 年、台湾北部山地での「理蕃五カ年事業」）  
1914 年、第一次世界大戦参戦（青島・「南洋諸島」）  
1918 年、シベリア出兵

（参考）義勇隊員たちが、戦争動員に関して 1980 年代に「日本人と同等の補償を」という主張をしていた。高聰義さんらが日本政府を訴えるが敗訴、国連人権委員会にも控訴。1987 年「台湾住民である戦没者の遺族等に対する弔慰金等に関する法律」、議員立法（王育徳さん尽力）。戦病死者と重傷者を対象に弔慰金 200 万円。謝罪はしていない。1994 年に軍事郵便貯金は 120 倍で支払い（河野 HP 参照）。河野利彦 HP「棄てられた皇軍兵士たち」。

**参考文献（日本語のもの）** 周婉窈『図説台湾の歴史（増補版）』（平凡社、2013 年）

柳本通彦『ノンフィクションの現場を歩く：台湾原住民族と日本』（かわさき市民アカデミー、2006 年）

中村勝『捕囚：植民国家台湾における主体的自然と社会的権力に関する歴史人類学』（ハーベスト社、2009 年）

松田京子『帝国の思考：日本「帝国」と台湾原住民』（有志舎、2014 年）

中村ふじゑ『オビンの伝言：タイヤルの森をゆるがせた台湾・霧社事件』（梨の木舎、2000 年）  
シヤツ・ナブ（Siyac Nabu）著、戴佩如・古川ちかし編『セエデク民族』台中：台湾東亜歴史資源交流協会（2015 年）

中村平（2013）「台湾植民地統治についての日本の『民族責任』と霧社事件認識：第二次大戦後日本の中高歴史教科書の分析を中心に」『神戸女子大学文学部紀要』46。（中村平 HP「到来する暴力の記憶の分有」にてダウンロード可能）